

## 阿弥陀如来坐像

国宝である平等院の阿弥陀仏（阿弥陀如来）は、鳳凰堂にある蓮を象った台座の上で、ほぼ1,000年の間たたずんできました。彼は片方の足を曲げてもう片方の足の上にしっかりとのせ、伏せ気味のまぶたをとおして、像を見る人々をまっすぐに見下ろしています。彼の柔らかい顔、伸びた背筋、組んだ手がリラックスした集中を醸し出しています。

その像は、藤原頼通（992-1074）が平等院を建立した翌年の1053年に完成しました。他の多くの浄土信仰徒と同様に、彼は末法の時代（「戒律の終わり」）が迫っていることを恐れていました。信者は、末法の間には仏教の教えがすたれ、災害で土地が荒れ果てると信じていました。頼道は、彼を阿弥陀の西方極楽浄土に届けることを期待し、信仰の証として像の制作を命じたのです。この2.8メートルの像は、著名な仏師である定朝（?-1057）の手による、現存する唯一の平安時代（794-1185）の作品です。定朝は影響力がありました。彼の平等院阿弥陀堂は、その後2世紀にわたり、仏像制作の基準となりました。

定朝と彼の弟子達は、木材を組む**寄木造り**という技術を用いてこの阿弥陀を作成しました。この技術は、より大きく、軽く、より耐久性の高い像を構築するために、より小さな木材をくり抜き、彫刻して結合します。定朝と彼の弟子達が個々のヒノキの部材を一つに組み合わせた後、彼らは彫像の関節に漆と金箔を施しました。最終工程では、**寄木造り**のつなぎ目を消し、黄金の輝きを施します